



RISING

mini

Vol.02

一次創作、二次創作をひとまとめにした増刊誌 第二号登場!!

Creat.inc



目次

メカクシティアクターズ……………3

第二話 想像フォレスト……………3

第三話 メカクシコード……………12

ロジカリスト(白)……………19

1日目C 戸塚つぼみの場合……………19

2日目A 土生月火の場合……………23

ポケモン十ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編……………30

黒板厨ゆうなマギカ…結 第二回……………36

【新連載予告】ネクストワールド 名のなき世界3……………42

次号予告……………43

あとがき……………54

メカクシティアクターズ

第二話 想像フォレスト

とある森の中にある、とある小さな家。

そこにはひとりの少女が住んでいた。

名前はマリーという。

少女が本を読んでいると、夏の爽やかな風が、窓をノックした。

「なんだろう?」

そう思つてマリーは窓を開けると、部屋に鳥の音が響いた。何羽もやってきて、まるでマリーと話をしたがっているみたいで。

マリーはそれに気づき、読みかけの本を置いて、

「どこからきたんだい?」

と笑つてみせた。

鳥はその方には居なかった。

だって、マリーは目隠しをしているから。

古いのっぽな時計は午後二時を報せる鐘を鳴らしていた。

世界は意外とシンプルに出来ている。0と1だけで……表現は難しいかもしれないけどそれくらいで表現できそうなくらいだ。世界なんて複雑に出来ていれば恐らく単純な人間は生きていられないだろう。

だが、単純になりすぎるが故の、出来事だつて起きる。

彼女は複雑に怪奇した存在だった。複雑だからこそ、誰にも理解されることもなく、昔から彼女は独りだった。

だが、そんな彼女を優しく諭すのもいた。彼女の母親である。

彼女の母親はいつも彼女の頭を撫でて、

「大丈夫だよ」

と楽しく話してくれた。

マリーは町外れにある森の奥深くにひっそりと佇む家で暮らしていた。ずっと一人暮らしだけど、誰もやってこないから慣れてしまったらしい。せいぜい鳥たちが毎日マリーの焼くクッキーを目当てにくるくらいだろうか。

「さあさ。クッキーあげるよ」

そう言つてマリーはクッキーの欠片（それは事前に準備してある）を窓際に置くと、

鳥達はそれに群がって食べている。音で何となくわかるからだ。

きっと鳥は美味しそうに食べているんだろうか。マリーは思ったがそれをマリー自身が見ることは出来ない。だけど、鳥達の楽しく食べている表情を想像するだけでもそれって、結構楽しいことである。

「ふわあ……。もうこんな時間かあ」

どうやら、マリーは眠っていたらしく、気づいたら鳥は居なくなってたし、日は傾いていた。目隠しを外し、時計を見ると4時を少し回っていた。

マリーは立ち上がってさっきまで読んでいた本を本棚にしまった。いろんな本があるけどまだ読み終わらない。マリーが死ぬまでに読み終わらないんじゃないかな、とか思ってしまうくらいだ。

マリーはこういう体だから、目に写った無機物 \wedge モノ \vee にしか安堵することは出来ない。外に出たらずぐ理解されなくて、排斥しようとする。だからマリーは外になんて出たくない。出ようとは思わない。

「アラビアンナイトかあ……。…」

いいなあ、私も旅がしたいなあ……。…」

だから、彼女は物語の中でしか知らない色々な世界に、少し憧れる。別にそれくらい。

許してくれる、よね？ と。

彼女は毎日そんな理不尽なことを思い浮かんでしまう。

けど彼女の中じや、案外それが人生として成り立ってしまふ。

いつか突飛な未来を想像して、膨らむ世界がノックするのはありますか？

出来れば、今日か明日にでも。

彼女は、そんなことを思つて、一日を終えるのだった——

あの日がくるまでは。

「ほんとにこんな山奥にいるのか？ キド」

『そんなめんどくさいことでいちいち通信するな。“ヤツラ”にバレてしまふだろう』

「そんなこと言つても、バレないさ。きっと、ところで本当にこんな山奥に家なんてあるんだろうな？」

『なかつたときは私が責任をとろう』

「……体で？」

『○すぞてめえ』

「すいません許してくださいリーダー」

『最初からそう言つてればよかつたんだ。んで、家は見つかつたか？』

「……ああ、あれか」

少年は立ち止まつた。

そして、そこにあつたのは——

マリーの住む家だった。

「ここか……」

少年の呟きを聞き取ったマリーは、

「!!」

驚いて飲みかけのハーブティーを机中に撒き散らした。もし、鳥がいたら驚いて逃げてマリーがここにいるのがわかってしまったのかもしれない。だが、疑問点が浮かぶ。なぜ少年（マリーにはどんな存在かはわかっていない）がここに来ているのか、マリーには不思議でならなかった。

「どうしよう……」

とりあえずマリーは下に降りて、ドアの向こう——きっと、その声の元がいる——を見つめた。対策なんて、考える暇すらない。

「目を合わせると、石になってしまう」

ふと、マリーは母親から聞いたことを思い出す。

「私たちの目は成長すると赤くなる。」

その赤は見るものを凍りつかせて、石にさせてしまうの」

マリーの目もそうなっているらしく、時折鏡を見つめていると、写っているのは、赤い目。普通の人間とは違う、真紅の目。

だから物語の中じゃマリーのような存在は、怖がられる役ばかり、「仲良くしてくれる

なんてないんだ」ってことはマリー自身理解していて、それで怖がっていたのかもしれない。

トントン、とノックがドアのむこうから響いた。そんなのは初めてで、緊張なんでもんじゃ足りないくらいだった。なんだろう、マリーの目には『恐怖』すら浮かんでいたのかもしれない。

想像していた突飛な世界はマリーが思ったよりも、実に、実に簡単にドアを開けてしまっただけだった。

*

人間が嫌いだった。

母親が、死んだ訳を私は目の前で見たから。

私が数年前、人間に虐げられた。恐らく……珍しい存在と思われたから。

そしてそれに気づいた母親が私を守ろうと“力”を使って——死んでしまった。だから、私はずっと一人。ずっと、ひとり。

扉は唐突に開かれて、誰かが入ってきた。マリーはただ、目を塞ぎ蹲っていた。

その人は驚いていた。だから、マリーは言った。

「目を見ると、石になってしまっただ」って。

その人が、微笑んだのを、覚えてる。

「僕だっけ、怯えて暮らしてたんだ。まるで、石のように。

だけどき、世界は案外怯えなくていいんだよ？」

その人はそう言ってマリーに服を着せた。なんだろう、この服は？ とマリーがつぶやこうとして。

「これはパーカーっていうんだ。君も、メカクシするんだろう？」

これはそういう人にいい服だよ」

「……ありがとう」

「うん。お礼はいらないよ。そうだ。君って世界がわからないんでしょう？」

教えてあげるよ。うーんと、ちよつと待ってね」

そう言ってその人は薄い葉に近い何かを取り出した。

「これは、音楽プレイヤーだね。いろんなことがわかるんだ……。ほら、これを耳に当

てて……」

その人は、紐みたいなものをマリーに差し出す。彼女は言われるがままにつける。そして、耳に音が響いた。

世界は、やっぱり想像よりも素晴らしかった。

心の奥に溢れていた想像は、世界に少し鳴り出していた。

突飛な未来を教えてくれたあなたが、もしまだ迷ったときは、私がここで待っているからね？

彼女はそんなことを思うのだった。

*

外を出て、少年。

「ああ。キド。確かにメデューサはいたな」

『だろっ？ 私の調査通りってわけだ』

「キド。それじゃこれでいよいよ……」

『ああ』

キドと言われた少女はうつすらと笑みを浮かべて。

『——これでようやく、準備が整った。救いに行くぞ。「彼」をな』

第三話 メカクシコード

ヒビヤがやってきて、もう一週間がたとうとしていた。

ここは、メカクシ団のアジトらしい。だが、ここまでは目隠しされて連れてこられたのであまりよく覚えていない。

ヒビヤが思い出すのは——あの繰り返し八月十五日のみ。

「やあ、ヒビヤくん。調子はどうだい？」

ノックをして入ってきたのはキドだった。キドは珍しく笑っていた。その風景をヒビヤはなんだか珍しげに眺めていた。

彼女は今まで、笑うことはなかった。だからこそ、彼女の笑顔がなんだか変に見えるのだ。

「……調子は特に」

「そうか。ところで……いろいろ整理はついたか？」

「……はい？」

ヒビヤが尋ねる隙も与えられず、キドは何かを差し出す。

それはグレーのパーカーとPodだった。

「これは……？」

「メカクシ団の証だ」

「メカクシ団っていったいなんなんですか」

「この世界を創ったカミとやらに喧嘩を売ることを目的としている」
「何を言っているのか、さっぱり」

ヒビヤが思うこともなく。

「いいから、着ろ。作戦会議は十分後に開始するからそのつもりで」

そう言つてキドは部屋を後にした。

残されたのはヒビヤと、パーカーだった。

*

そして。

とある研究所にキド、ヒビヤを含むメカクシ団員はいた。

「いいか？ 作戦通りに決行しろよ？ 彼を……救うんだ。分かったな？」

キドの言葉に全員が頷く。ヒビヤも同じだ。

さて、とヒビヤはぐるりと見渡してみる。そこにいるのはクリーム色の服を着たメイドっぽい格好の女の子や、もうひとり女の子がいたりする。

「メカクシ団は女性人口の方が高いみたいだな」

「そりゃそうさ。女尊男卑とは言わないが、女性は多いし、団長が女性ってのもあるけどね。男共は雑用とかめんどくさげな仕事がほとんどかな」

「うげえ。なんてブラック」

「慣れればどうってことないよ？」

「すごいなー調教もしちゃう系かー」

「……つべこべ言うとマリーに石化を命令するぞ？」

「ごめんなさい」

そんなコントにも近いやりとりをして、キドは息を吸う。

「さあ、任務開始だ」

ズボンの裾が伸びきって iPod のコードが揺れている。イヤホンを充てがってフードを被っておけばひとまず問題はなさだろう。ヒビヤは走りながら独り事のように、呟く。

「……自隠し完了」

ヒビヤの目にはいつもどおりの見えない現状が広がる。非常灯が通路の両側から赤く光り、それはまたシニールな景色へとなっていった。

ヒビヤは思った。

案外今日がこなかったとしても生涯不安症な君とローファイな風景を連れて、明日へ行けることが出来たんだろう、と。

でも、そんな簡単じゃない。現実はそのような甘くないのさ。

だからいままで『メカクシ団』として準備を進めてきた。そして、今日だ。

「さあさあなんかないものか」

ふとヒビヤは呟いてイヤホンから流れる曲を聴きつつビートを揺れ気味に刻めば、この世界もそうそう悪いものじゃないようにも思えてくる。なんて慣れやすい性格なんだろうか、と思っていた。

だが——それと同時にヒビヤは飽きっぽい性格でもあった。

そんな虚栄心をのみこんで、二つ目の遮断機を右に曲がる。目的地はまだまだ先だが、警備がどことなく重々しくなってきたのが解ると、どうやら目的地が近いようだ。これからすることに、期待に胸が詰まって、思わず笑いが漏れそうになった。

しかしヒビヤのそれは空気に馴染んでしまっ、誰にも気づかれていないようで、結果的には断然オーライであったりする。

「任務続行」

キドからその言葉を伝えられたときはもうタイムリミットまで20分だった。

「……こりゃ、引けないな……」

そう言っつてヒビヤはスニーカーの紐を結び直し。

「ほら、合図だ。クールに行こう」

走りながら、ヒビヤは考えていた。

「……どうして、キドは僕に協力してくれたんだろう？」

それが不思議でならなかった。考えれば解る。なぜ二個人にメカクシ団という団体単位で参加するのか？ ヒビヤ自体よくわからなかったし、むしろこれで彼女が救えるのかも怪しかった。

だが、いまは藁をもすがる思いで、やるしかない。やりきるしかない。ヒビヤはそう思っ、走り出すのだった。

「……さて、時間か」

気分は最高だ。ピーキーは揺れて、警鐘も止むこともない。

キドは隣にいるマリーを見て、笑っていた。

すべて、計画通りだ。これで、“彼”を救える、と。

科学者は恐れて、ネオンを不意に落とした。キドにとってはそれすらもチャンスだった。

「さあ、今こそ君の出番や」

キドは怯えるマリーに微笑む。

マリーは、震えたまま、キドの方を見て。

「……私が？」

「ああ。そうだよ。君がやらねば、目的を達成することもできない。君の目的も、何もかもだ」

「……でも」

「さあ。やるんだ。頼む」

キドは小さく、頭を下げた。

「わわわ。別に……そんなことをしないで……。わ。わかったから……」

そう言つて、マリーは、

目を――合わせた。

「……ここか」

キドは、実験室のような部屋にたどり着いた。そこにはひとりの少年がいた。

そして、キドは嬉しさのあまり、声を震わせ、言った。

「——ここにいたんだな。会いたかったぞ……コノハ……！」

「RISING mini」第三号につづく。

ロジカリスト（白）

1 日目C 戸塚つぼみの場合

「……あなた、ケイリーって言うんだっけ？」

「そうだけど」

彼女は、沙織は、ケイリーっていうニックネームが一般化していて自己紹介をすることでさえ自らをケイリーと呼ぶ。なんでもか知らないけど。

「……鬼才とか天才とかそういうカテゴリーに入らなさそうな人ではあるけど、いったい君はどういう存在かな？」

「それは私じゃなくて、こっちの方じゃない」

ケイリーは僕を指差して、言った。パーカーの少女は僕の方に視線を変えて——じろじろと眺めていく。

「ははあ。そうだ。君は、どちらかといえばケイリーや私のような存在ではないね？」

「ええ、まあ」

僕はケイリーの付き人できただけに過ぎないから。

「でも……君はどちらかといえば、私のような感じを秘めている気がするね。鬼才……でも天才でもない、ダイヤの原石のような存在だ」

「何を言っているかさっぱり」

「そうか」

彼女は首を傾げた。

「それを知っているのは他でもない君自身であると思うが……まだ自覚してないようだ。まあ、それもいいだろう。生き方は人それぞれだ。私が選ぶ生き方もあれば、君の選ぶ生き方だってある。千万の通りがあるんだから」

「……ぐーすか」

ケイリーが寝ちゃったよ。

話がつまらなかつたわけじゃないけど、すこしつまらなかつたみたいだ。

「じゃあ……僕はこれで」

「ああ。時間を取らせてしまつて、すまなかつたな」

そう言つて、彼女は踵を返して歩いていった。

「……ちよつと待った。一つだけ、聞きたいことがある」

しかし、直ぐに立ち止まり僕の方に振り返つた。ケイリーはもう僕の背中であつちよく眠っている。全てを任せているから、さつきより若干重い。

「なんですか。……出来れば、手短に」

「そうだな。ならば単刀直入に聞こう。……彼女は探偵役だろうか？」

「なぜそんなことを？ そうだとしたら、どうするんです？」

僕がそれを訊ねると、彼女はすこし考えて言った。

「……いや、別にそうではない。だがな、この探偵犯人ゲーム、——“そう簡単には終わらない”と思うぞ」

「そう簡単には終わらない？」

「なに、忠告だ」

そう言つて、彼女は今度こそ去つていった。

「そう言えば、名前言つてなかったけど誰だったんだろ……」

「……むにや、戸塚つぼみ、だつて」

「なんだ、ケイリー起きてたのか」

起きてたならさっさと自分の部屋まで歩いてくれればいいのに。

「無駄な運動はしたくない。頭の演算に支障を来すから」

「そうかもしれないけどさ……階段を二人分の体重で昇る僕の身にもなつてくれよ」

「……そうだったね。ごめん」

「おつ、やつと謝ってくれた」

「だけど、歩くことはしないよ。いいじゃないか、すぐそこだし」

だからこそ歩いて欲しいんだけどなあ。

そんなことはぐつと心にしまい込んで、やつと僕らは自分の部屋へと戻つてきた。ケ

イリーはというと、ベッドに横たわらせたならそのまま動かなくなつたので、寝てしまつたのだろう。僕も後を追うように隣に寝転がり、目を瞑つた。

寝ようとしても、眠気が無ければ案外眠れないものだ。眠気つてのは脳が疲れた信号を送っているからであつて、つまり僕は脳をまだ疲れるほど使っていないのだ、と思うと少しため息が出た。

今日あつたことを、整理してみる。

まず、オーナーは結局初日に姿を現さなかつたこと。

次に、探偵犯人ゲームの開始合図が明確にならなかつたこと。

次に、戸塚つぼみという謎の少女。特に最後が気になる。

当てずっぽうではないと思う。何故彼女はケイリーが探偵役であることを知つていたのか。まさか、部屋に入ったわけでもないだろうし。

「……明日、考えれば解るか……」

それだけを言つて、僕はベッド脇の照明を消した。

2日目A 土生月火の場合

朝が明けた。

二日目の朝で、僕らの滞在もあと五日ということになる。即ち、あと五日で犯人を見つげなくてはならないのだから、ケイリーの役割も随分大変なものだ。

目が覚める。時計を見ると七時をすこし回ったばかり。司さん曰く、朝食は七時半だったのでそれまでに一階の食堂に向かえばいい。つまりはあと十五分くらいか、それまでは暇を潰さなくてはならない。

ふと、ケイリーの方を見るとノートパソコンを開いて何かをしていた。すこし横から見ると原稿を書いているらしい。気付かないってことは集中しているんだろうな。

「やあ」

「……おはよう、エヴァン。お腹が空いてしまったよ」

「あと十五分もすれば朝食になるよ。それまで待ったらどうだい」

「待てないから持ち込んだ牛乳を飲んだよ」

「夏だから腐ってないかなあ」

「大丈夫だ。ちゃんとクーラーボックスに入れていたからね」

なんだか論点がずれている気がするけれど。

果たしていったい何の原稿を書いているんだろう。

「カルネアデスの板を用いた犯罪の犯罪性について」

「……カルネアデスの板？」

「そう、カルネアデスの板。聞いたことないみたいだから、言うけど」

そう言っただけでケイリーは非常にめんどくさそうに USB に保存されている大量のフォルダ群からひとつのテキストデータを取り出した。確かケイリーの持っている USB は少し前に発表された TPB の USB だ。どうしてそんなものを持っているのか訊ねたら、それを聞くのは野暮だ、と言われて結局出処は解らなかつた。気になる。

「……一隻の船があるとき転覆してしまつてね。ひとりの男が板切れにしがみついて助けを待っていたんだ。だけど、もう一人それに捕まろうとした人間がいた。当然のごとく、一枚の板切れの浮力なんて高が知れている。二人とも助ければその板切れは沈んでしまう。……それを解っていて、あえて彼はその人間を突き飛ばした」

「それじゃ、そのもう一人は」

「死んださ。水死……溺死の方が近いかな、ともかく彼は生き残つた。その人間を犠牲として。しかし、その後彼は罪に問われることとなる。罪は——殺人罪。しかし、そこでは彼を裁くことはできない。彼だって生きることに必死だったからね。それに今の日本の法律じゃ、刑法三十七条で罪には問われないから」

「刑法三十七条？」

『緊急避難』。急な危険を避けるためにやむを得ず他者の権利を侵害したり危難を生じ

させている物を破壊したりする行為であり、本来ならば法的責任を問われるところ、一定の条件の下にそれを免除されるもの……ってことだ」

「……結局、その男は罪に問われなかったわけだね？」

「そうだ。つまり、それを利用した犯罪は罪に問われないのか、というのが今の原稿のテーマだね……」

「それ、大学に提出するやつ？」

「いや、これは趣味。遊びだよ。大学に出す奴はもう出来てる。みるかい？ 『極分極磁石の存在とその理論について』」

「いや、遠慮しとくよ」

ケイリーの話をやんわりと断って、僕は時計を見た。

「——まずい！ もう七時二十五分だ！」

「確か七時半から朝食だったかな。あーあ、お腹すいたよ」

そう言つてケイリーは僕の目の前に背を向けて座った。髪を結つてくれ、という意味だ。頷いて、僕は髪をポニーテールの如く結った。

忘れ物はないかな……いや、忘れ物なんてどうでもいいだろう。とりあえず、まずは時間厳守。朝食の時間だ。

一階の食堂はひどく静かだった。ほとんどの人間が揃つてはいるものの、皆静かに本を読んでいたり、ぼーっとしていたりと自分の世界を没頭していた。変わっている。

とりあえず僕とケイリーは隣同士に座る。いろいろあるけれど、やっぱり彼女の隣が落ち着くというのもある。

「……もうしばらくお待ちください。まだ、土生様が来ておりません故」

執事さん曰く、まだ土生さんが来ていないらしい。昨日のリコーダーの人だ。あの感じじゃ起きるのも大変なのかな……。

「おかしいですね……。さつき、『ちよつと用事があるから先に行つて』的なことを言われたので先に来たんですが」

付き添い人の産土明さんはそんなことを言っていた。ちよつと子供っぽい顔と声は実際幾つなのか解りづらい。にしても、その発言を聞くからして、今付き添いらしからぬ発言をしたような気がするのは気のせいか。普通、付き添いの人間つてのは行動を共にしないのだろうか？ はたまた、仮にその人間からついてくるなど言われても先ずは理由を訊ねないだろうか？ そういうところが、気になつて仕方がない。

「……だからつて時間がかかりすぎだ。もう朝食の時間から何分経過したと思つている」
そう言つたのは一二三さんだ。見た目は十二歳、そして実年齢も十二歳の彼女だが天才数学者として、数学界に革命を起こしている……らしい。僕は新聞とかあまり読まないから、実際にそうなのかはしらない。大半が本人か、もしくはケイリーからの知識の受け売りだ。

一二三さんは土生さんと親友の関係にあるらしい。幼稚園の頃から……正確には『二

ニュートン・ユニバーシティ』物理学者アイザック・ニュートンを作り上げることが目的とした学校法人のことだ、そこからの仲らしい。

ニュートン・ユニバーシティはIQ140以上の七歳未満の人間ならば入学を許可しているという、特殊な学校である。しかし学校とはいえ、学校特有の長時間の授業は存在せず、あるプログラムのもと一年間を過ごすスタイルとなっている。そのプログラムは一人一人割り振られており、それはすべて校長が決めていくらしい。

入文永登（いれぶんえいと）。

弱冠十七歳にして錬金術における基幹原理のミスを指摘、さらにアイザック・ニュートンが生前考えていたとされる錬金術と魔術の融合にも成功させた。……即ち、すごい人間だったことだ。今のところさわりしか話してないが、それでもすごい。

「……ただ、魔術がほんところにあるのかは証明されていないけどね。錬金術を魔術と言い張っているってことも有り得るし、現に生前のニュートンは魔術は錬金術の応用に過ぎないってことを自らの著書で言ってたくらいだ」

「そんな話聞いたことないぞ。だってアイザック・ニュートンは哲学者で近代物理史は彼から始まったって歴史的にも証明されている。……つまり、錬金術なんて関係ないんじゃないか？」

「そんなわけないよ。ニュートンは錬金術師としても活躍している。一番の活躍は水銀を発見したことだ」

そんなこと知らなかった。なるほど、そうだったのか。

……おっと、忘れていた。

一二三さんが気付いたら居なかった。ということとは、今土生さんの部屋にむかったということだろうか。土生さんの部屋は一階の奥にあるから、僕の目の前にある廊下を通らなくちゃ進むことはできない。つまり、今いる人間がここを誰も通らないことを証人としている。つまりは、彼らが全てここを通る人間との膠着状態になっていることを指している。

一二三さんが戻ってくるまで皆が歓談をすることとした。歓談といっても、僕から聞けばツマラナイ歓談ではある。

「だからさあ、神の存在証明はオイラーやキルヒヤーもやっているんだ。僕らだって新しい存在証明を作れるはずなんだよ」

「だけど、それはどうなんだろうね？ カミサマってもんが居るのならば、世の中に苦しんでいる人なんて居ないと思うけど」

「馬鹿だな、予定説があるだろ？ カルヴァン派が説いた話だ。カミが試練を与えるから苦しいんだ、ってやつ」

戸塚さんと、ケイリーが神の存在証明について話をしていった。

神の存在証明ってものはひどく難しく、かつ論理証明のテーマとして用いられているから様々の個別な思考を持つ人間がその証明をしていった。

「実際には予定説は反対しているキリスト宗派が多い」

「だけど、資本主義にはそれが取り込まれているんだ。ドイツの経済学者、マックス・ヴェーバーだって言ってるよ。予定説では金銭を目的とする労働はカミに背くと言われていたから、それによりカミに従っていけば金銭が入り豊かになる。それが結果として資本主義の労働へと繋がっていったってのも書いている」

「……まあ、そうなんだけどね」

返す余地がないのか、ケイリーは黙ってしまっていた。戸塚さんは話すのに飽きたのかスマートフォンを弄りイヤホンを耳に当て音楽を聞き出した。再び部屋は静かになった。

部屋は静かになっても、ここに流れる独特の……なんて言うんだろう……オーラという単語が近いかもしれない、ともかくそんな感じの何かが僕はあまり好きじゃない。

ポケモン十ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編

第二回

ゲンムの国に、カズヒデたちはやってきた。

ゲンムの国はこのランセ地方でも一番の人口を誇る。その理由は至極簡単で、二つ挙げられる。

ひとつは、その気候だろう。ランセ地方の中心に位置するこの国は北が海に面しており、気候も穏やかである。だからこそ、人々はこの地に居を構えているのかもしれない。

次に、ここを収めるブシヨウの気性だろう。ここを収めるブシヨウ……ケンシンと、それを支える姉・アヤゴゼンの存在が、この国を平和にもたらしめている原因でもある。

「……とりあえず、来てみたはいいけれど……、すごい活気だな。とてもイクサをしている国とは思えねえや」

カズヒデは呟く。彼は今、屋台で購入した串焼きをほおぼっていた。カーフはそんなカズヒデの脇をしゃなりしゃなりと歩いていった。そんなカーフを不思議な目で眺める人も多かった。エーファイというポケモンは、このランセでも珍しいからなのかもしれない。

「……そんなにお前、珍しいポケモンなのか？」

カズヒデが訊ねるも、カーフにはそんなことは知らないので、同じように首をかしげ

るしかなかった。

「……ところで、カズヒデくん。お金をそんなに無駄使いしてもらっちゃ、困るんだけど？」

「し、シノ。これは、必要経費だぞ？」

「どこがよ！」

カズヒデの直ぐ後ろを歩いてきたシノとブラツキーは同じように威嚇する。

「飼い主に似るってまさにこのことだよな……」

「何か言った!？」

「な、何も言っておりません!!」

「な、ならいいけれど。とりあえず、ちゃんとしてよねー。あんたがリーダーなんだから、リーダーがダメに見えたらその味方まで変に見られちゃうんだからさ……!」

シノたちの少し離れたところを歩くオイチ、シオン、ハンベエは笑いながらゆつくりと歩いていった。

「彼女たち、いつもあんな感じなの？」

ハンベエが訊ねると、オイチはため息をつきながら、答える。

「……さつきとくつつけばいいのに。なんというか、カズヒデはカズヒデで気づかないから、シノのああいう行動にまったく気づかないのよね……。だからシノもイライラが募って、ついけんかになってしまう、と」

「悪循環な訳だ。つまりは」

「ハンベエが導き出した結論に、オイチは渋々頷く。

「出来れば、カズヒデの夢が叶ったあとにシノの夢も叶えばいいのだけれどね……」

オイチがため息をついて答えるのを、シオンはオイチの肩をたたいて慰める。

「ふうん……で、一つ質問があるんだけど」

「なんででしょう？」

「——あの二人、どこに行った？」

「え？」

オイチがそう言われ、あたりを見渡すと、既にカズヒデたちの姿は見当たらなかった。

第三回

カズヒデとシノは歩き歩いて、ある路地裏へと足を踏み入れた。

「おつ、そのの二人。お買い物かい？」

そこに居たのは、ひとりの男だった。男はあごひげを蓄えて、それを右手でねじねじと捻っていた。

なんだか不気味な雰囲気を見ただけでお腹いっぱいな位流していたので、カズヒデはさっさとここから立ち去ろうとしていた。

「変なお店じゃないよう。ここは、ただのぼにぎり屋さ。ちよつくら見てつてくれよ」

「……、」

そう言われると。と思いかズヒデは少しだけそのお店のラインナップを眺めることにした。

赤ぼにぎり、青ぼにぎり、紫ぼにぎり……全てポケモンのテンションを上げる道具だ。

テンションを上げると、簡単なことで、戦力が少し高まる。さらに新たな姿を手に入れることもあるとして、よくブシューのあいだでも用いられているものだ。

そこまで見ると……ただのお店に見えるのだが。

「……あれ、この『黄ぼにぎり』ってなんだ？ ほかの国では見たことがないぞ？」

カズヒデが男に疑問をぶつけると男はにっこりと笑う。

「おおつ、お目が高いね。それは『黄ぼにぎり』といって、それさえポケモンに食わしちまえば勝利は間違いないってやつだ！ 今なら金千でどうだ！」

「金千かあ……。シノはどう思う？」

カズヒデはシノに訊ねる。

「うーん……。魅力はあるけれど、なんとなくやめたほうがいいんじゃない？」

「私もそう思いますね」

そんな、透き通った声が響いて、ふたりは振り返った。

気付けばそこにはひとりの女性が立っていた。白のフードをかぶり、着物のような服を着て、その肩にはクマシユンが乗っていた。

「あ、あなた様は……」

「うーん、おかしいですね。私の記憶ではこんなところに安く売ってくれるぼにぎり屋なんて存在しなかったはずですが……。まさか『許可』をとっていません、なんて言いませんよね？」

女性の目は笑っていなかった。それと同調するように、男の顔も引き曇っていった。
「ず、すまねえ……。も、もうしねえからよう……」

「ならば最初からしないものです。さっさと立ち去りなさい」

「へへえ！」

そう言つて男はそそくさと逃げていった。

「……統制はしているのですが、よくああいうのが出るのですよ。気をつけてください
ね」

女性は柔かに微笑む。

「ありがとうございます」

同時にふたりは感謝の気持ちを述べた。

「自己紹介とまでは言わないが、私の名前はアヤゴゼンという。このゲンムの国を収める
ブシヨ、ケンシンの姉だ。また何かあったら私を訊ねるといいだろう」

そう言つてアヤゴゼンは踵を返し、路地裏を出ていった。

黒板厨ゆうなマガカ…結 第二回

※前回からタイトルが変更となりました。

【2】

人が人として生きていられるのは、人と人が寄り添っているからだって？ そいつは違うな。人ってのは、人がどつしり足を開いて立ってるんだらうよ。

そうだ、そういうことだ。

さっさと、自分の道を切り開いてみたらどうだ？

【3】

「そこにいる清白優菜という存在は清白優菜という存在ではあるが、君の知る清白優菜ではない。つまり何を言っているのか解らないかもしれないが……、要は『別世界』の清白優菜ってことだ」

「……それじゃあ、この世界の優菜はどこにいるというの？」
「死んだよ」

突然の事実にも、篝は言葉を失った。

「……どうということよ……?」

「言つたまでのことだよ」

矢代智行の話は続く。

「君が好きなのは清白優菜は、今ここには居ない。今ここにいるのは別世界の清白優菜だ。現御神計画が、以前も行われたことは知っているか？」

篝はそれを聞いて首を振った。

「知らないだろう。だからこそ、言わせてもらおう。かつてシャルロットという女王を現御神計画の媒体にしたときは失敗したんだ。そして彼女は黒板世界へと成り得た。…そして、闇の垂霊含め会議場の一員は取り決めたんだ」

——ないなら作ってしまえ、と。

「……造る？」

「そうさ。簡単なことだろう? よく考えつかなかったよな。今までの世界では確かに幾回も清白優菜は現御神計画ではなく、ワルプルギスにて黒板世界と化した。つまりは、『それ以降のことなんて、誰も予測できていない』そう考える人だって居るはずだろう? だがね、それを知っている人間が、それを知り得た人間が、それを可能とした人間が、君以外にも居た——という訳だ」

「私以外にループし得たとでも……?」

「そうさ。そして君と同様何千回もループした。けれども、ちゃんとした結末は得られなかった。……そして、今回は君に接触した。実に明解なパターンだ。そして……ここまで来た。今までのループとは違う、新たな世界。なあ、そうだろうか？」

こつこつと。

足音が聞こえ、それは篝のいる場所までやって来た。

それは篝も知る人物だった。

「……比嘉倉夏未？」

そこに居たのは、比嘉倉夏未だった。

「彼女こそ、君と同じくなんどもループしてきた存在だ。しかしながら、その終点が君とは異なっていたけれどね。彼女はなんどもこれに近い時系列を経験している。しかし、今回のような時系列はまだまだ体験したこともない。謂わば未知数の時系列だと言っていたよ」

「どう……いう、こと？」

「つまりね……比嘉倉夏未こそが、カミとなるべき存在。カミとなるべく生まれた存在って訳だ。ある世界線では、清白優菜の母親を演じたとも言われているのは……恐らく君だって知っているだろう？」

篝はそのことを何も気付かなかった。まさか、優菜の母親——清白夏未がそんな存在だと、知ることになかったし調べることもなかったからだ。

彼女が叫ぶだけで、その銃を夏末に向けて撃つことは出来なかった。

そして。簞の黒板消しが——白く染まっていた。

「RISING mini」第二号につづく。

特報

黒板厨ゆうなマガカ…結

浄 2013年10月19日

夏 2013年10月26日

連続投稿決定。

「――黒板厨の彼女たちに、バッドエンドは似合わない」

詳しくは <http://necorondo.jimdo.com/cabinet/yumagi/> をチェック！

予告 名のなき世界3

名のなき世界シリーズ、新章突入！

第三号より連載開始！

次号予告

第三号

7月11日頃刊行予定！

ポケモン+ノブナガの野望、ロジカリスト、メカクシティアクターズなど連載！
名のなき世界3も連載開始！

あとがき

大分遅れました。

まさか七月にまで食い込むとは正直思ってもいなかっただけで……驚きです。

次は10日後くらいに刊行です。是非、お楽しみいただければ幸いです。

あと、ここで連載した『ポケモン＋ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編』はちょうど第二号が出たあたりに、ピクシブでまとめ版を出します。一年以上ぶりですので、お久しぶりとは思いますが、是非お願いします。書き下ろしオマケも毎回のごとく収録しています。

それでは。

奥付

発行 2013年7月1日